

日本大学文理学部

史学科同窓会

會報

第一号(通号七八号)

平成二八年三月三十一日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二―二五―四〇

日本大学文理学部史学研究室内

TEL〇三―五三二―七一九七〇三

同窓会設立迄の歩み

同窓会 会長 竹石 健一(昭和三八年度卒)

現在の日本大学史学会は当時の大学院生と教員を中心に設立されたと聞く。従って、当時の会員構成は、在学生と一部の教職員・卒業生とであった。そして、学会の機関誌である『史叢』の内容も研究者等による研究論文と会員の動向などを中心とする「雑報」の両者であった。しかし日時が経過するに従って、研究論文を必要とする会員と雑報の部分だけを要望する会員に二分される傾向があらわれはじめるにいたった。さらに『史叢』に掲載される論文の価値の軽重も問題となり始めていた。すなわち、日本大学史学会を學術団体に登録し、『史叢』掲載の論文の価値を高めることが行われた。こうした傾向も会員の二分化に拍車をかけることとなった。

史学会設立当初から、入学時に日本大学史学会会員となる仕組みになっていたものからその後希望者のみが会員となることとなった。そうしたなかで、『史叢』の掲載内容の「雑報」の部分新たに『会報』として発行することとなり、その「雑報」の部分希望する会員に配布することとなった。しかし、時の経過と共に『会報』も創刊から第七七号をもって廃刊となってしまったことは誠に残念なことであった。こうした経緯の中で、日本大学史学会とは別に同窓会設立準備委員会が組織され、その活動の一環として卒業生同士の親睦をはかることを目的に懇親パーティーを毎年開催すると同時に、住所不明の卒業生の確認が続けられたが、思うほどの成果は得られなかった。さらに数年前からパーティー参加の卒業生から、同窓会設立準備委員会から正式の同窓会にしてほしい旨の意見が寄せられるようになった。

平成二六年三月開催の懇親会パーティーの席上、同窓会設立準備委員会委員長の小生から正式に同窓会に格上げすることを宣言し、同時に卒業生の横山則孝氏、大河内隆氏と当時の学科主任の関幸彦氏の三名を副会長にお願いし、了承された。その後、小生と三名の副会長と複数の役員候補者による数回に亘る会議で会則、役員、パーティー、同窓会誌等々に関して検討され、その原案が平成二七年三

月開催の同窓会で承認された。

このような経緯をたどって正式に発足された日本大学文理学部史学科同窓会であるが、難問が山積している。例えば、地方に居住している卒業生、年金生活の卒業生などを考えると同窓会を毎年開催することは是非もその一つであろう。

今後の同窓会の活動に期待したい。

会誌の発行に際して一言

副会長 横山 則孝（昭和三九年度卒）

かつて日本大学史学会は、史学科同窓会であったといつてよい。学会は、学部学生と卒業生が連携し、専任教員を巻き込んで結成された。

その機関誌は、はじめ『研究彙報』といい、のち誌名を改めて、今も続く『史叢』となった。この機関誌が卒業生を結びつける唯一の「絆」であった。少なくとも間違いない印刷物においてをやである。

印刷物以外では、秋におこなわれる文理学部学術研究発表会における史学部会において、研究発表後におこなわれた懇親会がもう一つの卒業生を集める機会となった。毎年この回に出席することを楽しみにしていた卒業生は多かつ

た。時には二次会にもでかけたりして、卒業年度を異にする人々との交流は深まった。又、来年会いましょう！それまでお元気で！と別れるのが常であった。それがかつてのような盛りあがりのある会はいつの間にか途絶えてしまっている。まことに残念なことである。

その後『史叢』は諸般の事情から学術雑誌として純化をとげ、同窓会的色彩を失っていく。そのため同窓会的役割をもものとして、もう一つの機関誌として「会報」の発行がなされた。見学会の記事などが印象に残っている。しかしこれも途絶えて久しい。

以上のような状況の中で、最近まで細々と（このようにいい方は主催してきた方には大変失礼ではあるが）同窓会準備委員会が活気をなくしてしまった同窓会の役割を果たしてきたものといえよう。同窓会発足への灯をともし続けてこられた竹石会長の労を多としたい。それがこの度いよいよ準備委員会を発展的に解消して、会則をもった正式の同窓会として発足することになった。総会と懇親会とならんで活動の一つとして「会報」が発行されるという、これがあれば格段と同窓会が活発化するであろう。遠方にある会合に参加できないものも「会報」誌上で参加できるようになるからである。より一層卒業生の「絆」が強くなることであろう。寿命がのび定年後の余生がますます長くな

りつつある現在、健全な精神を維持するためにも同窓会の役割は重要である。会誌の発行萬歳！

同窓会の広がり

副会長 大河内 隆（昭和四〇年度卒）

日本大学文理学部史学科同窓会準備委員会は平成一七年度から竹石健二準備委員長を中心として、同窓会設立を目指して活動してきたが、今回ようやく同窓会会則も準備され組織として機能し始めた。

この間、準備委員会を支えてこられた竹石先生、企画、運営に当たった歴代の研究室事務局の諸氏、諸嬢には改めて感謝したい。

同窓会の在り方、展望については他に触れる機会もあると思うので、一会員、個人からの視点で考えてみたい。例年三月に開催される同窓会準備委員会の総会パーティーには時間の許す限り参加した。このことは「同窓」、まさしく同期の学友と再会して旧交を温め、次いで史学科の現況について知ることであった。ただ、参加者を辿れば、私が卒業した昭和四〇年度生は、鎌田重雄先生の衣鉢を継承し、あの大学紛争の激動期に研究室助手を務め、混迷を深めていた各研究会の中で、唯一正常な活動を維持した東洋史研

究会を主導した畏友榊原文彦氏と私の二人だけであった。

しかし同期生は少なくとも七〇余名（夜間部を含めて）は在籍していたはずである。この方々は全国各地に住まわれていると思われるが、学生時代、各種研究会や運動部の活動などで、現在でも同窓会とは別に交流があるのではないか。

同窓会の会員の動静を把握することは現在では様々な事情により、困難を極めているが、卒業年度を点（縦軸）とすれば、同期生は横軸（線）として拡大していく可能性は十分にある。私自身反省を含めて、これから横軸の拡大を目指していきたい。日本中世史のT君、近世史のH（旧姓）さん、東洋史のS君、考古学のH君、射撃部のK君、沖繩から《留学》していたO君、それから、かつての東洋史研究会に学び、教え子でもあった諸君、是非再会したいものだ。

同窓会発足にむけて

副会長 浜田 晋介（昭和五六年度卒）

大学生活はみなさんの人生のなかでも、それぞれの青春の思い出が詰まった時間で有ったことと思います。その時間が終わり社会に飛び出し、いつの間にか歳を重ねてしま

つたと感じている方は多いことでしょう（私もそのうちの一人です）。また、大学卒業後、一度も文理学部に向いたことは無い、という方も多いと思います。あるいは、大学卒業以来、文理学部のこととは一度も考えたことはない、とおっしゃる方もおられるでしょう。しかし、そうした方々でも、大学時代に培った活動や知識、あるいは人間関係が、現在の自分に影響を与えていることを自覚されている方は、多くいらつしやると思います。

日本大学史学科同窓会は、そうした人びとが、史学科という枠で繋がっている、唯一無二の組織です。また、在籍していた時間や現在生活している場所は異なつていても、そうした時空を越えて繋がる史学科卒業生と新旧教員の集まりです。

同窓会というと旧交を温め、親睦を深める、というイメージを持たれるかも知れません。当然そうした目的はもっています。しかし、新しき者は古き者から学び、古き者は新しき者から刺激を受ける場であり、面識のない卒業生同士が出会い、新たな関係を結んでいく場としても存在していると思つています。その舞台の場が長い準備段階から、正式な同窓会として昨年から動き出しました。

同窓会は発足したばかりで具体案はこれからですが、今後総会は必須のこととして、いくつかの行事を実施する予

定でおります。ただ、同窓会運営の役員の数は限られており、そこから出されるアイディアにも限りがありますので、会員の皆さまのお知恵も拝借したいと考えています。こうした行事や同窓会運営にもお力をお貸しいただき、皆さまとともに充実した組織にしていきたいと願っています。

史学科の昔と今

〈恩師探訪〉

——今回は恩師探訪の第一回目として早い時期のご卒業で、戦後の日大の考古分野にご尽力をいただいた澤田大多郎先生にお話をうかがうことにしました。お忙しい所をありがとうございます。まず卒業した頃の史学科の様子はいかがでしたか？

（澤田）私は昭和三三年四月、文理学部一期生として入学しました。当時桜上水校舎は医学部・理工学部などの教養学生と一緒にして、各教室は常に満員状態でしたね。夏に陸上競技場の東に四号館が完成しましたが、研究室は四階隅で電話は事務室にしかなく一番遠く苦労した記憶があります。研究室は三分され、一つは先生方、一つは学生用、一つは大学院講義室と考古遺物置場に利用されました。学

生数は昼・夜間部合わせて約一五〇名、教員は一〇名前後で東大系が多かったと思います。途中で定年制が施行され、長老である石田・和田・龍・山中先生方が退任あるいは非常勤講師となられ、若返りがはかられたようですね。本学卒業生として荒居英次・次いで佐々木正勇先生が着任されたことははげみになりましたよ。講義は一般教養、教職課程が多く、卒論は一二・六単位でした。機関紙は昭和三二年度に『研究彙報』（現『史叢』）が刊行されました。研究会は日本史（中世・近世）・東洋史・西洋史・考古に分れ、夏季には合宿調査・研究を重ね、大学祭の展示は各研究会の持ち回りで行われ、他に見学会・ピクニックなどが催されていました。

——卒業生の進路の状況についてはいかがでしたか。

（澤田）そうですね、自分と同期の卒業生は、昭和二五年以降では一番少なく昼・夜間部を合せて二九名だったと思います。この頃は助手のいない時期もあり、就職に関する追跡調査が不十分でしたね。昭和三〇年代の卒業生の多くは、教員・公務員（市役所・役場）・大学の事務員で約三〇四割を占めていたはずですよ。とりわけ附属高校などに勤務する者が非常に多かったですね。

就職活動も現在のように会社めぐりも激しくなく、先輩や知人の紹介による場合や自家業を継ぐ者が多かった時期であつたと記憶しています。

——いい時代だったかもしれません。それなりにですが、それはそれとして学生運動についてのお話をお聞かせください。

（澤田）当時の学生は発言・行動する者が多かったですね。特に六〇年安保闘争の肯否を巡っては授業時間を割いて、自分達の将来のことを考え参加すべきか、学生の学ぶ本分を貫くべきかなど激しい議論が交わされました。結果的には団体ではなく個人として各自が参加しましたが、同級生の中から逮捕者が出たりしました。大学院修了後、日大三億円不明金問題が発覚しました。各学部にも全学共闘会議が結成され、授業は中止、連日神田などでデモが行われるなどしましたが、その状況はマスコミで報道されご存知かと思えます。そんなことで不規則な学園生活が続きました。中には教員を辞める者、留年する者、仲の良かった友達に不信をもつなど、楽しい学園生活でなかった悲しき時期でした。特に鉄条網で守られたにわか木造校舎での授業を経験した後輩達の胸中はいかばかりであつたらうかと思

いますね。

——最後に「ご自身と考古学との関わり方についてお話を
いただければと。

(澤田) 最初は憧れの石田先生の指導を求め、東洋史を
専攻しましたが、定年制がひかれ先生との縁もうすくなり
研究会をやめました。その後信頼する先輩が多く、疎開で
開墾を経験したこともあり、汗と泥の考古学の道を選んだ
わけです。発掘調査はOBと学生研究会員で組織する日本
大学考古学会が中心となり、春・夏休みを利用し、附属高
校のある福島・茨城・神奈川・静岡県で行われることが多
かったですね。当時の宿舍は休みの小学校や公民館を利用
するため、寝具を送り、食費一日五〇円で調査したりしま
した。昼飯のシソ巻きオニギリとキュウリ一本は肉体作業
にはつらかったことを記憶していますよ。調査は古墳と寺
院址が多く、縄文・弥生時代を専攻する自分はいつしか離
れ、川崎・横浜・藤沢をフィールドとするようになりまし
たね。日大紛争後、二つに分裂していた学生研究会が二〇
年前に統一され、研究室を中心に活動しているという嬉し
い報告がもたらされなんだかホツとしています。

——ありがとうございます。貴重なお話はわれわれに
とって大きな宝です。今後ともお元気で「活躍」ください。

(質問者・文責 関 幸彦)

〈現役学生の声〉

史学科三年 品田 信一

——澤田先生には「昔がたり」をしていただきましたが、
昨今の学生生活というテーマで現役に「今がたり」をお願
いしました。今回は本学科三年の品田信一君です。さっそ
くですが品田さんの勉強しているテーマとか、今の学科の
現状とかを聞かせて下さい。

(品田) 自分は二年生から中世史の関先生のゼミで勉強
させてもらっています。三・四年の合同ゼミですので人数
も多く、班ごとに鎌倉時代の漢文史料『吾妻鏡』を分担し
つつ、条文ごとに発表するスタイルです。史学科の閲覧室
や書庫にも自由に出入りしながら、大学院生やゼミの先輩
たちにも相談して文献の調べ方を学んでいます。ゼミでは
鎌倉見学や卒論合宿などもあり、それなりに忙しいです。
“知力”とともに“体力”も必要な感じですよ(笑)。日大は
マンモス大学のイメージがありました。文理学部に関し

てはきめ細かな指導もあって、環境としても悪くない気がしますね。

——学生の雰囲気についてはどうですか？

(品田) いろいろ世間では低年齢化と言われますが、若者の気質は同じようなものかもしれません。ただ確実に言えるのは、ゼミ生四〇名近くのうち、タバコを吸う人間は十人程度ですし、酒もさほど飲みません。スイーツ男子、とか草食系とかは、時代の流れでしょうが・・・。はずかしながら、読書量は確実に減っていると思います。まわりを見てもほぼ八割の人間がバイトしていて余裕がなくなっているみたいですね。

——なるほどね。マジジャンなんかはしないの？

(品田) ぼくはできないし、やっているのはゲームで対応できますから、四人がツルんでやるとけっこう面倒ですからね。そもそも下高井戸駅前に雀荘なんかもうありませんね。

——ところで品田君を含めゼミ生たちの出身はどの地域

が多いですか。

(品田) そうですね。ほぼ関東エリアですね。ぼくも埼玉県ですが、付属校出身者がゼミでは一割程度でこれを別にすれば、やはり東京、神奈川、埼玉、千葉の出身者が大半でしょうか。もちろん西日本の出身者も数人はいますが、少数ですね。“東高西低”でしょうかね。

——品田君は卒業後どんなところに就職したいですか。

(品田) まだはつきりはしていませんけど、そろそろ本腰入れて考えなければと。自分の性格から公務員が向いているかとも思いますが、何しろ希望者が多く狭き門だから、相当頑張らないと難しいみたいです。

史学科に入ったとしても、これを就職に活かす道はそんなに多くはないでしょうし、学芸員も難しいですし、教員も同じでしょうから。その意味では、仲間たちの歴史や学問に対する意識は以前と相当ちがうのではないのでしょうか。法学なり経済という実学志向もわからないわけじゃない。けれども会社人間になる前に好きな歴史を楽しみたい。だから、就職に直結するかしないかは、大きな問題ではない。どの学部を出ても似ていますから。卒業後は歴史

を活かせればラッキーだしダメでも別の道でやる。こんな
気風があると思います。だから切迫感はあまりないかもし
れません。歴史という学問と将来を結びつけなければなら
ない理由についてはさほど考えていないのではないでしょ
うか。

——いろいろありがとう。『当世学生気質』風な場面で
現役学生に学生生活の一端をうかがうことが出来ました。

(質問者・文責 関 幸彦)

近況通信

○付属校勤務も早一二年目を迎えました。「教育」をめ
ぐる環境が大きく変わろうとしている昨今ですが、生徒た
ちの笑顔は変わらず未来に向かって輝いています。部活指
導で文理グラウンドにも頻繁に行きます。

平成一三年度卒 竹内由美 (旧姓相沢)

○十数年ほどの間に、二度の病により入院し、医者から
再発防止とリハビリのため、歩くことを勧められています。
定年となり、時間もできましたので、目的をもった旅行に
出かけています。今では文献でしか知りえなかった諸国一
宮も山城国以東は完了し、これからは西国を歩く予定です。

一宮が終わったら、マニアックですが、国毎に一寺・一塔
建立された安国寺・利生塔(址)も歩こうと思っております。

昭和四五年度卒 高村 隆



写真
史学科書庫



写真
史学科学学生閲覧室

平成二七年度史学科行事紹介

した。

四月 一日 ガイダンス開始（四月七日まで）

九月二四日 後学期ガイダンス

四月 二日 文理学部開講式

九月二五日 後学期授業開始（二月一日まで）

四月 八日 日本大学入学式（日本武道館）

九月二七日 文理学部秋季オープンキャンパス

四月 九日 前学期授業開始（七月二九日まで）

史学科では、松重充浩教授による特別授業

七月二〇日 文理学部夏季オープンキャンパス

「清朝の統治構造の特徴と辛亥革命」を行いました。

史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほか、土屋好古教授による特別授業

一〇月三二日 文理学部ホームカミングデー

「ロシアから見た日露戦争」を行いました。

史学科では、学術研究発表会（史学部会）

七月三〇日 遺跡発掘調査（八月一日日まで）

を開催しました。また、同日から一月二

南中野遺跡において、考古学実地研究の野

日までの三日間に文理学部の学園祭（桜麗

外実習が行われ、一九名の学生が参加しました。

一二月三三日 冬季休業開始（一月一日まで）

八月 一日 夏季休業開始（九月二三日まで）

一月一三日 卒業論文受付開始（一月一五日まで）

八月 八日 東洋史ゼミナール合同合宿（一〇日まで）

二月 四日 春季休業開始（三月三一日まで）

日本大学軽井沢研修所において、加藤ゼミ、松重ゼミ、粕谷ゼミの合同合宿が行われ、

卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式

一七名の学生が参加しました。

九月一七日 考古学ゼミナール合同合宿（一八日まで）

長野県において、浜田ゼミと山本ゼミの合同合宿が行われ、二九名の学生が参加しま

平成二七年度史学科データ一覧

(二月一五日現在)

史学科専任教員

- 日本史 中村順昭教授(日本古代史)
関 幸彦教授(日本中世史)
- 上保 國良教授(日本近世史)
- 古川隆久教授(日本近現代史)
- 東洋史 加藤直人教授(東・北・中央アジア史)
松重充浩教授(東アジア近現代史)
粕谷 元教授(トルコ近現代史)
- 西洋史 坂口 明教授(古代ローマ史)
土屋好古教授(近代ロシア史)
森ありさ教授(アイルランド近現代史)
- 考古学 浜田晋介教授(日本考古学)
山本孝文教授(東アジア考古学)
- 文化財学 大塚英明教授(文化財学)
- 史学科研究室スタッフ
林 亮 助手A(中世フランス史)
堀川 徹 助手A(日本古代史)
青木 咲子 助手B・天野 頌子 助手B
三上絵里子 助手B・宮川 詩音 助手B

平成二七年度史学科非常勤講師数

五三名(大学院を含む)

平成二七年度史学科開講科目数

- 総合教育科目 半期一〇コマ
- 学科専門科目 半期一七・二コマ
- 教職課程 半期二コマ
- 学芸員課程 半期一八コマ
- 通年二コマ(集中含)

平成二七年度史学科開講科目一覧

- 歴史学入門ゼミナール
- 史学概論一・二
- 日本史入門
- 東洋史入門
- 西洋史入門
- 考古学入門
- 日本史概説一・二
- 東洋史概説一・二
- 西洋史概説一・二
- 日本考古学概説一・二
- 外国考古学概説一・二
- 日本史基礎実習一・二
- 東洋史基礎実習一・二
- 西洋史基礎実習一・二
- 考古学基礎実習一・二
- 日本史研究実習一・二
- 東洋史研究実習一・二
- 西洋史研究実習一・二
- 考古学研究実習一・二
- 日本史ゼミナール一・二・三・四
- 東洋史ゼミナール一・二・三・四
- 西洋史ゼミナール一・二・三・四

- 考古学ゼミナール一・二・三・四
- 文化財学ゼミナール一・二・三・四
- 日本史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 東洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 西洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 考古学特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 日本史料研究一・二・三・四
- 古文書・古記録学一・二・三・四
- 東洋史文献研究一・二
- 西洋史料研究一・二
- 西洋史文献研究一・二・三・四・五・六
- 考古学方法論一・二・三・四
- 考古学実地研究一・二
- 遺跡解題一・二
- 歴史民俗学一・二
- 文化財学一・二

平成二七年度史学科学生在籍者数

- 学部生 一年生 一四九名
二年生 一六〇名
三年生 一五三名
四年生 一五三名
合計 六一五名
- 大学院生(M)
一年生 一名、二年生 九名
合計 二〇名
- 大学院生(D)
一年生 一名、二年生 一名
三年生 三名
合計 五名

日本大学文理学部史学科同窓会会則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は日本大学文理学部史学科同窓会と称し、事務局を日本大学文理学部史学科内に置く。

(成員)

第2条 本会は日本大学文理学部史学科を卒業した者、日本大学大学院文学研究科史学専攻・日本史専攻・外国史専攻を修了した者、満期退学を含む等、および史学科教職員を経験した者を以て組織する。

(目的)

第3条 本会は会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業)

第4条 本会は第3条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- ① 総会および同窓会懇親会の開催
- ② その他目的達成のために必要な事業

(会計)

第5条 本会の会計は会費を以てこれをまかない、会計年度は1箇年とする。期間は4月1日から翌年3月31日までとする。

(会費)

第6条 本会の会費は終身会費5千円とし、入会時に納入するものとする。

(その他)

第7条 本会の会員は、住所・氏名・勤務先・学校・その他において変更を生じた場合、速やかに本会事務局に届け出るものとする。

第2章 運営・組織

(総会)

第8条 本会は毎年1回総会を開くこととし、次の事項を行う。開催時期は別に定める。

- ① 運営・事業・会計および会計監査報告
- ② 役員の選出および承認
- ③ その他必要な事項

(役員および組織)

第9条 本会は次の役員により組織する。

- ① 会長 1名
- ② 副会長 3名
- ③ 理事若干名
- ④ 幹事若干名
- ⑤ 会計監査 2名
- ⑥ その他必要と認められる役員

2 本会の役員はそれぞれの任務に当たることとする。

- ① 会長は本会を代表する責任者として本会会務を総理し、理事長を兼務する。会長は必要に応じて総会・理事会等を招集することができる。
- ② 副会長は、会長が諸般の事情により職務を遂行できない場合にこれを代行する。

③ 理事のうちから、会計理事1名、総務理事1名を選出する。会計理事は本会の会計・財務の運営管理・予算の作成を行い、年

1回以上理事会・会計監査に会計報告を行う。総務理事は理事長を補佐し、総会・理事会等の運営および議事録の作成・保管を行い、必要事項を会員と役員に報告する。

④ 会計監査は年1回以上の会計監査を行う。

⑤ 幹事は理事会の要請により本会運営の補佐に当たる。

3 本会の役員組織は次の通りとする。

① 理事会は会長・副会長・理事をもって構成する。理事会は年1回以上行い、本会の運営・企画・財務の管理および会員と役員提出議案の審議・決定を行う。また、本会総会の開催と諸事業の執行、本会員の管理、通信連絡などの諸事業・事務にあたる。

4 本会役員は次の通りとする。

- ① 会長・理事は総会によって選出される。
- ② 副会長は会長の指名で決定する。
- ③ 幹事は理事会にて選出する。
- ④ 会計監査は総会にて会員中より2名を選出する。

5 本会役員の任期は1期2箇年とし、再任を妨げない。

第3章 付則

第10条 本会会則の改定は、理事会の審議により総会の承認を必要とする。

第11条 本会の運営および諸事業にかかる諸経費は有料にすることができる。

第12条 本会会則は平成27年4月1日より発効する。

日本大学文理学部史学科同窓会・平成二七年度役員

○役職名

氏名（卒業年度） * 卒業年順

○会長

竹石 健二（昭和三八年）

○副会長

横山 則孝（昭和三九年）・大河内 隆（昭和四〇年）

浜田 晋介（昭和五六年）

○理事

吉田 聰（昭和四三年）・上保 國良（昭和四四年）

小形 利彦（昭和四四年）・大塚 英明（昭和四五年）

加藤 直人（昭和四八年）・高綱 博文（昭和四八年）

中嶋 秀行（昭和四八年）・小松 修（昭和四四年）

並木 洋明（昭和六〇年）・黒滝 哲哉（昭和六〇年）

濱田 泰邦（昭和六〇年）・片倉 芳和（昭和四五年）・修士

関 幸彦（専任）・中村 順昭（専任）

○会計理事

楠家 重敏（昭和四九年）

○総務理事

武廣 亮平（昭和六〇年）

○会計監査

下川 雅弘（平成八年）・西野 吉論（平成一〇年）

○幹事長

粕谷 元（昭和六三年）

○幹事

※幹事は誌面の都合上、省略しました

編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。URLは左記の通りです。近況通信の募集などのお知らせもホームページで詳細を掲載しますので、是非ご確認下さい。

○編集後記

「眠眠打破」よろしく休止状態を脱し、ここに復活した同窓会『会報』の第一号をお届けできました。試行錯誤のなかで多くの方々のご協力をカタチにできました。体裁・内容その他で課題も少なくないと実感しています。ともかく伝統の継承に参加できたことに感謝です。卒業生と史学科の「つながり」と「きづな」のためのこれからの乞御期待。



写真
史学科研究室がある二号館の外観

史学科同窓会ホームページURL

<http://www.nu-hist-d.jp>